

八尾チーム、三泊四日の町家合宿

大挙12人、調査と地元交流に日夜充実

○●● text_shiozawa photo_yatsuo member

本格的な調査に、いよいよ乗り出した八尾プロジェクト。今回は7月7日から10日までの4日間、間に「風の市」や地元の方々との会合を挟んだ濃密な4日間となった。

中島助手、岡村(D3)、永瀬(D1)、江口・後藤・三澤・楊(M2)、伊藤・塩澤・筒井・平林・ボンサン(M1)の計12名という大所帯で、今回は町家をお借りして宿泊させていただくことになった。肌で八尾の生活に一時でも浸れるという幸福な数日間。「家の鍵は誰がもっているのー」などという会話がよく交わされ、4日間ではあったがその町家は皆にとって自分の家になっていた。

今年の主な活動は「上新町」という新たに関わる町と一緒に、今後ど

のようなまちにしていくか、課題を探る。そして昨年度に引き続き動き出した「西町」とも歩みを共にする。4日間のうち3日間はそれぞれの町の方々と夜に会合を開き、町の歴史やこれまでの活動などのお話を伺い、あるいはお酒を交えながら今後の方向性について話し合った。

昼間、まちの調査をしていると声をかけてくれたり、家の奥まで上げていただいていた中をみせていただいたり、あるいはお茶まで出していただいたり、名前を覚えていただいたり、頼りがいのある先輩の様子を横目で伺いながら、まちに関わっていくことはこういうことなのか、とそのやりがいと責任を少しずつ実感しはじめたM1たちなのだった。



気合の実測調査。
この敷地は現在空き地で今後どのように利用していくかは要検討



- ☐ 昼間は30度を越える猛暑に見舞われて調査も体力勝負
- ☐ 宿泊した町家で会合後に地元の皆様と2次会
- ☐ 「風の市」色鮮やかなデントにさまざまな出店。通りを賑わす



一日の反省とまとめは1階の居間で

上新町女性部との会合。とても積極的に話し合いに参加してくださった

第2弾コンペ始動～自由が丘～

小学生の想いをかたちに ○●● 横田 俊介(M1) photo_yokota

舞台はおしゃれなまち自由が丘。自由が丘駅、誕生77周年を祝して、未来の自由が丘の駅とまちを描きます。

小学生が画用紙一枚に描いたまちの将来像をセミプロとしての大学生・院生が具体的なまちづくり案として仕上げるといふ他に類を見ない面白いWS型コンペにデザ研が参戦。7月9日、第一回小学生の部審査会として各大学(東大・東工大・多摩美・法政・武蔵工・工学院)から3名が出席。小学生の描く「絵」が189作品も(!)並びました。各校、タイアップ作品をひと

つ選定。私たちのクライアントは「ももちゃん(9歳)」。青い空が大きく広がり、屋上にはお花とみどりいっぱい空間、子供たちが楽しく遊べて、雲のすべりだいでまちに降りてきます。最後まで小学生の「夢」を残せばきっと魅力的な案が提示できる! M1を中心に約10名が参戦予定。7月23日には実際にももちゃんとお会いしてお話を聞きます。最終プレゼンは10月24日。こどもの夢をかたちに。頑張ります!

右/まずは第1回目のワークショップに M1の石井・横田・ボンサンが参加



上/ももちゃんの描いた夢。これをどう発展させていくかが腕のみせどころ

明舞コンペ(裏面参照)に引き続き、さらに多くのメンバーを巻き込んでの自由が丘コンペ。明舞の経験を活かしてさらなる飛躍を期待。

text_shiozawa



熱気上昇、喜多方まちづくり 景観協定締結へ向けて

text, photo_ishii

7月1日から3日にかけて、本年度2回目の喜多方訪問を行いました。

喜多方チームは現在、「蔵の町並みが残る小田付地区における景観協定締結」「メインストリート・市役所通り的大幅拡幅問題」「蔵の再活用：『中高生対象のまちづくり塾in蔵』の実施」という3つの活動に対し、特に重点的に関わっています。

今回の訪問は、景観協定締結の第一歩として実施された「小田付まちあるきワークショップ（景観資源・障害要因を見つけ、住民・行政・東大チームの3者で議論：地元新聞記事が研究室掲示板に貼ってあります）」がメイン。他にも、豪雨の中の景観現地調査・自作模型を使っての市役所通り拡幅の是非の議論、まちづくり塾の舞台になる蔵の大掃除

など、息つく暇もない、盛りだくさんの日々でした。

前回5月は「お客さん」として訪問した僕達M1も、今回は一応の戦力として参加。作成した資料や模型、アイデアや発言のひとつひとつがそのまま実際のまちづくりの血肉になるという体験をし、面白さと責任を感じます。一方で、経験に勝る地元の皆さんから逆に指摘を受け、学ぶ場面も…。いや、これぞプロジェクトの醍醐味といったところでしょうか。

次回訪問は、7月末の予定。蔵を利用してのワークショップ・「まちづくり塾」を開催し、地元中高生と将来の喜多方について考えます。乞うご期待です。



右/小田付の中央通りの景観について意見を交わす 永瀬D1(写真右)チーム



左から/W5は2日間に分けて開催され、のべ40人が参加した。

まちあるき後、D研喜多方分室にて意見をまとめる。

9階に吹け、涼風

扇風機購入運動に協力を

マガジン社説

text_bannai

「暑いっ！」最近の研究室でもっとも多く耳にすることはだ／特に、人口・機械密度の高い9階院生室は、既に廊下からもわりとした熱気が伝わってくる／昔から暑かった。建物の構造上の問題。通風がとにかく悪い」とおきらめ半分の古参院生／「暑さに慣れておくことも役に立つ」と苦しい弁明の助手／でも、本当にこのままでよいのか／まちづくりを追究する我々が、足下の暑さに対して無為無策のままでは、という現状は、恥ずかしいといわねばなるまい／建物の構造や予算の制約はあれど、その範囲のなかで創意工夫をこらして、協力して、少しでも研究しやすい環境を創ってゆくべきではないか／梅雨明けも迫り、夏の暑さは加速度的に増してゆく／聞くとところによると、現在、窓側に偏している冷房の冷気を、2台の壁掛式扇風機の風力で部屋全体に循環させようという「扇風機購入」運動が起こっている、という／いささが遅きに失した感はあるが、至極正当な主張だ／9階院生室においては、あるいは、9階を利用する他階諸氏も、応分の負担をもってこの運動を支援されんことを望む

text_shiozawa

プロジェクトに参加していて、この経験がいかに貴重かをじわりじわりと感じる今日この頃。実際のまちに関わっていくって住民の方々と接して、当たり前のことだけれどもはたと気づく。相手がいる、ということ。教科書で勉強しているだけではなかなか味わえないこの感覚。次第に顔なじみになってお互いの存在がわかる距離で具体的な提案をしていくことの責任の重大さ。やりがいとおもしろさと、そして同時に襲いかかるこの重圧。自由に飛び回ることができないように、それでいて確かな根拠に裏打ちされたものであるように、まだ始まったばかりなのだから。

今回の訪八ではメンバーそれぞれのキャラが大爆発な4日間。深夜発のレンタカー2台に缶詰になった10名の集団はさながら遠足。(もちろん本題はつつがなく遂行されました。)宿泊場所も町家をまるごとお借りできたこともあって夜中のミーティング後、まだまだこれからといわんばかりに八尾の夜は更けて行くのでした。

つくばまちあるき暑中敢行

奥田 紘子 (M1)
photo_okuda



- つくば三井ビルディングから南方への眺め
- 緑の生い茂った歩行者専用道が整備されている
- 農村集落・崖上に鎮座する神社への参道。鬱蒼とした木立
- つくばセンタービル(磯崎新)前の広場

本格的な夏の暑さのもと、7月13日、新領域北沢研究室の一大プロジェクト、「柏の葉キャンパス構想」の一環として、「つくばまちあるき」が開催されました。案内してくれたのは、筑波大学にて修士課程を修了した中島伸D1、筑波大学建築系研究室の小山雄資さん(D2)、不破正仁さん(D1)の3名。昨年開通したつくばエクスプレス(TX)に乗って、柏・本郷のメンバー11名(D1:中島伸、永瀬、M2:竹山、早坂、坂内、M1:奥田、塩澤、新領域M1:砂川、平林、松尾)が参加しました。

まずは、市内で一番高い188mのビルから街を一望。つくば市の公共住宅を対象に修士論文を執筆し

た小山さんからレクチャーを受けながら、計画と開発需要によって造られた街の現在を概観しました。その後は、街中を巡るペDESTRIANウェイをたどりながら、磯崎新・谷口吉生・坂倉準三などの巨匠が手がけた建築群を見学。昼食後は車に乗って不破さんの案内で周辺農村集落を見て回り、中島D1の出身研究室(筑波大学藤川研究室)にもお邪魔しました。最後は、吉瀬という集落にある再生中の古民家も見せてもらい、学び・体験・交流が盛りだくさんの1日となりました。今はぼぼまっさらな柏キャンパス周辺も、やがては筑波のような歴史を持つに至るのだと、都市計画の担う責任を、じっくりと感じました。

M1有志の明舞コンペ

飛行機に飛び乗り提出へ!!

ボンサン (M1)
photo_shiozawa

兵庫県神戸と明石の市境にある明石舞子団地(明舞団地)を訪れてから1ヶ月あまり、M1で結成された有志チーム(石井、伊藤、筒井、ボンサン)はラストスパートを駆けた。喜多方・八尾の両プロジェクトの厳しい日程調整の中で、その合間を縫うように各自は設計作業に取り組んだ。全員が揃ってまとめ段階に入ったのは、実にメ切的二日前になってしまった。

その様子を一言で語れば、最後はアクシデントだらけのドタバタ劇。常時動いていた9Fのプリンターが提出前夜に突然印刷不可になってしまったり、最終作業が集中

したパソコンはファイルの重さで反応が鈍くなったりして、緊張感が部屋中に漂っていた。7月14日、何とか神戸行きの飛行機を1便遅らせ、石井院生は全員の希望を背負いながら時間ギリギリで提出先へと足を運んだ。

後の連絡によれば、無事に提出できたとのことで何よりだった。今後のコンペはもちろん、研究室プロジェクトでも、「余裕を持って早めに終わらせること」が、有志全員の教訓になったのではないだろうか。



右/提出締め切り日の朝には研究室中に明舞の足跡が。時間がなかなか確保できない中で最後までやりぬいた男たちのまさに「勇姿」でした